

【エッセイ】「なんで松倉は福祉の道を選んだの？」

と、聞かれることがある。私はそう聞かれる度に、「何となくかなあ」とはぐらかしてきた。いや、はぐらかすというよりは、答えに困ったという方が適切かもしれない。実を言うと、私が福祉という道を選んだことについて、自分でもよく分かっていない。気付いた時には、自分には福祉の道しかないと思うようになっていた。そのため、先のような質問をされた時は、上手く答えられず、はぐらかすことしかできないのだ。

そんな私も、宮東の福祉科に入学して、早くも四ヶ月が経とうとしている。これまでの間、私のこれから歩んで行く世界について、多少のことは学んできたと思う。実際に介護現場で必要とされる技術を学ぶ生活支援技術。リハビリ等に着手したところとからだのしくみ。そもそも福祉・介護とは何なのかを知り学ぶ社会福祉基礎・介護福祉基礎。これらの福祉科目は、これから私がどんな福祉の道を選んだとしても、絶対に欠かせないものである。また、そのように感じるのは、次のような出来事があったからであろう。

それは、入学して約二カ月が経った頃、登校途中の話である。普段通り自転車に乗って学校へ向かっていた私は、突然誰かに呼び止められた。振り返ると、そこには自宅の駐車場端で仰向けになって倒れている人がいた。事情を聞くに、木の根に躓き転んだ際に腰を打ち、痛くて自分の力だけでは立ち上がることが出来なかったらしい。当時、周囲には私とその人以外誰もいなかった。一時は、近隣の人を呼ぶべきか選択に困った。それでも、学んだ知識、主に声掛けやボディメカニクスを活かしたことで、自分の力でその人を安全かつ簡単に立ち上がらせることが出来た。その時、言い表せない程の達成感と、福祉を学んでいて良かったという安心感を覚えた。今思えば、それ程すごいことでは無く、またただの自己満足であったとも思う。しかし、その出来事があったからこそ、今胸を張って福祉の授業を受けることが出来ていると私は考える。

私は、何故福祉の道を選んだのか、自分でも分からない。しかし、どんな理由であったとしても、私の福祉に対する気持ちは変わらない。何故なら、人を助けることの素晴らしさを実際に知ったからだ。そして、これからも福祉の道を選んだ自分を誇りに思い、いつか社会福祉に大きく貢献できるような姿を目指し、これからも福祉の授業に臨んでいきたいと思う。